むきばんだ花だより 6月

2017. 6. 3

ネジキ(椨木)ネジキ科、ネジキ属、
むきばんだ公園入口、2017,6,3,

☆6月の植物観察会は、公園事務所から公園管理上、公園内の「希少植物」の所在を知りたいとの要望があり、公園入口から妻木山地区、妻木新山の一部を案内をした。環境も徐々に変化しているためか、群落の規模の縮小(コクラン、ムサシアブミ)や、生育の悪いもの(オオバノトンボソウ)等がありました。

◎ネジキ(椨木)、ツツジ科、ツツジ属、落葉高木。

別名:カシオシミ、名前の由来:幹が捩れているから。花言葉:悲しみの涙。季語:夏(花)○樹高は6～7m位で5月頃、前年の枝の葉腋から総状花序を出し、白色の壷型花を下向きにつける。枝に沿って横に並ぶ様子がユニークです。

★有毒植物であり島根県三瓶地方で「霧酔病」と云い原因不明の牛馬の疾病が流行ったが、これはネジキを食べたことによる中毒であることが後に判明した。

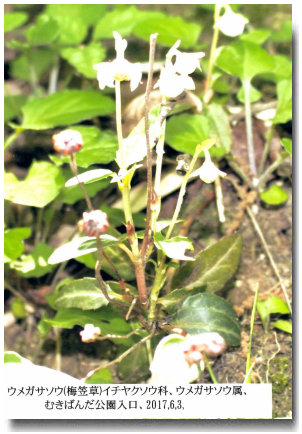
★撮影日:2017,6,3, ★撮影場所:公園入口坂の途中。

◎イタチハギ(鼬萩)、マメ科、イタチハギ属

別名:クロバナエンジュ(黒花槐)、葉の様子がエンジュ(槐)に似ているから。名前の由来:黒紫色で穂の様な花をイタチノ尾に見立てた。○北アメリカ、メキシコ原産。日本には、韓国から1912年に初めて導入され、1940年以降に緑化や観賞用として本格的に輸入され、日本各地に野生化しています。

★撮影日:2017,6,3, ★撮影場所:妻木山地区

イタチハギ(鼬萩)、マメ科、イタチハギ属(別名)クロバナエンジュ、
妻木山地区、2017,6,3,


ウメガサソウ(梅笠草)イチヤクソウ科、ウメガサソウ属、
むきばんだ公園入口、2017,6,3,

◎ウメガサソウ(梅笠草)、イチヤクソウ科(新しいAPG植物分類体系ではツツジ科に含まれている。)、ウメガサソウ属。常緑の草状の小低木。花期は6~7月。花は、白色で普通1個、まれに2個付き始めやや下向きに付くが果実が熟すにつれて上向きになる。花笠草の和名の由来は、花の形がウメ「梅」に似て下向きに咲く様子を「笠」に見立てたものです。

★撮影日:2017,6,3, ★撮影場所:公園入口坂の左側。

コクラン(黒蘭)、ラン科、クモキリソウ属、
妻木新山地区、2017,6,3

キンラン(金蘭)、ラン科、キンラン属、
妻木新山地区、2017,6,3,

＝《アジサイ》について＝

◎アジサイ《紫陽花》アジサイ科、アジサイ属。

○「アジサイ」の語源は、はっきしないと云われます。『万葉集』では(味狭藍)、(安治佐為)、『和名類聚抄』では(阿豆佐為)が書かれていて、最も有力とされるのは、「藍色が集まったもの」を意味する(集真藍)が訛ったとする説と云われます。他に「厚咲き」が転じたもの、花の色が良く変わることから(七変化)、(八仙花)、また、「よひら(四比葩)のはな」が《紫陽花》の別名とも言われ、俳句では夏の「季語」です。

○漢字の「紫陽花」は唐の詩人白居易が別の花、おそらくライラックにに付けた名前で、平安時代の学者源順がこの漢字を当てたことから誤って伝えられたと云われています。

○花言葉:辛抱強い愛情、一家団欒、家族の結びつき、など

★「アジサイ」は有毒植物であり、園芸や切花として利用の際には注意が必要です。「2008年6月茨城県の飲食店で料理の「ツマ物」として添えられていたアジサイの葉を食べた人々が嘔吐、吐き気、目眩等の中毒症状を起こした事例があるそうです。」

● 梅雨のじめじめとした季節に、鮮やかな色彩で咲く「アジサイ」は，雨露の輝きと相俟って本当に綺麗ですね。皆さんの家庭でも何株か育て楽しんでおられる事でしょう。「アジサイ」は、日本に14種類ほど、海外に10種類ほど自生しているそうです、日本原産の花で中国からシルクロードを経て、ヨーロッパまで広がっているそうです。「アジサイ」は自生の状態でも変種が多く、育つ土壌によって形や色が違います。この特色を活かして品種改良が盛んに行われ、見る人の目を楽しませています。アジサイの種類は、一般的には3種類あり、①ガクアジサイ・②ヤマアジサイ・③セイヨウアジサイ(ホンアジサイ)、に分類されています。

◎ガクアジサイ。別名「ハマアジサイ」

日本固有の種類で寒暖に強く日当りの良い所に咲きます。分布は、本州(房総・三浦・伊豆半島)、小笠原諸島と狭い範囲の比較的暖かい海岸地域に自生しています。花も葉も大型で，両性花の周りに「額縁」の様に装飾花が咲くのが特徴です。PH(土壌の酸性度)による色の変化も大きくて、アジサイの特徴を色濃く持っています。栽培品種に、花火、城ケ崎など多くの品種があります。

ガクアジサイ

ヤマアジサイ(山紫陽花)、アジサイ科、アジサイ属、
妻木山地区、2017,6,3,

◎ヤマアジサイ。別名「サワアジサイ」

分布地域は、本州(福島以南の太平洋側)四国、九州、朝鮮半島南で広い範囲で自生しています。分布地域が広いためか自生地域による違いや、多くの変種が有り「手まり咲き」や「額咲き」等、咲き方も豊富です。装飾花の色は白色が主ですが、花が受ける光の程度に応じて赤色が増してきます。ヤマアジサイとガクアジサは良く似ています。ヤマアジサイは全体にこうぶ毛が多い，葉が薄め、光沢がない、背丈が低め、開花時期が5月下旬頃~6月頃で少し早め、等で見分けることが出来ます。また、変種が出来やすい性質を利用して、多くの園芸品種が作られています。栽培品種に、紅、土佐緑風など多数あります。

◎セイヨウアジサイ。別名「ホンアジサイ」。

日本原産のガクアジサイの品種ですが、花序が殆ど装飾花で「手マリ」のように集まった普通のアジサイが「ホンアジサイ」です。自生しているとの説もあり、起源ははっきりしません。他のアジサイと区別のため「ホンアジサイ」と呼ばれます。日本から中国、シルクロードを経てヨーロッパで改良され、大正時代に日本に逆輸入された品種です。在来種より交配しやすく、多くの園芸品種が存在します。これらを総称して「セイヨウアジサイ」また属名の英語読みの「ハイドランジア」とも呼ばれています。園芸品種も多数あります。

セイヨウアジサイ

【『アジサイ』～この名は、本来ガクアジサイのテマリ咲きになったものを指しています。しかし、ガクアジサイ、ヤマアジサイ、エゾアジサイ、などを含めた広い意味でも使われています。混乱を避けるためには、ガクアジサイのテマリ咲きを、《ホンアジサイ》と呼ぶのが良いようです。】～アジサイ おわり～

◎オヤブジラミ(雄藪虱)、セリ科、ヤブジラミ属

野原や道端に普通に生える2年生草本です。薬用植物。
別名:「ひっつき虫」・「ナガジラミ、～果実の部分がヤブジラミより長いので～」○名前の由来:ヤブジラミに似ているが、果実(花)が少なく、大きく疎らに着き、大まかな感じがすることから「雄」が付いた様です。○花言葉:「人なっこい」~衣服に付いて種をはこばせる。~
林縁に春の内から若草色の細かく、切れ込んだ葉が見られる。花の頃はヤブジラミより早く全体的に紫色を帯び、花も赤みがかかり霞んでいるようにも見える。花はセリ科特有の複散形花序に付くが、花の数は多くない。ヤブジラミにバトンタッチするように初夏には姿を消します。
★撮影日:2017,6,3,　★撮影場所:妻木山地区

◎クロキ(黒木)のモチ病、ハイノキ科、ハイノキ属、

「クロキ」は、日本固有種で、南関東以西の比較的暖かい海岸付近に分布し、枝葉を燃やした灰から良質の灰汁(アク)が採れ、染色に使われます。『写真』は「クロキのモチ病」でした。モチ病はツバキの葉が膨らむイメージでしたので驚きでした。「クロキ」の枝先が妙な形状になっています。《モチ病はツバキ類やツツジ類だけに発生する病気と云われでいますので。》モチ病は春と秋、特に春、日当たりが悪く、多湿になり易い場所に多く発生し、新葉や新芽等の一部が、淡い緑色や黄緑色に肥大したり、白い粉を生じ、多発すると生育不良や枯死する事もあります。
★撮影日:2017,6,3,　★撮影場所:妻木山地区、

◎ヤナギハナガサ(柳花笠)、クマツヅラ科、

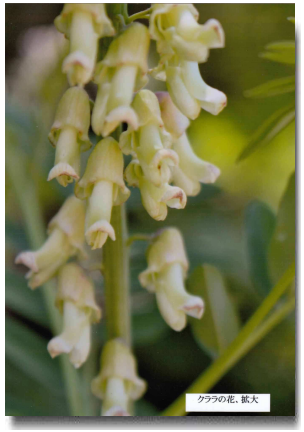
クマツヅラ属、多年草、別名:サンジヤク(三尺)バーベナ、
バーベナ・ボナリエンシス、○名前の由来:ヤナギのように、細長い葉と、花笠の様な半球形に集まった花の姿に由来します。「バーベナはヘブライ語の良い植物が語源で、宗教上において神聖な草であることに由来します。○花言葉:「幸運に」「魅惑する」。○南アメリカ原産で日本には園芸植物として導入されたが、野生化し空地や道端に生えています。茎は、強靭で、直立して開いた株立ちになり剛毛が多い、断面は四角形で中空。高盆状の青紫色の花が、円錐状の集散花序につきます　。
★撮影日:2017,6,3,　★妻木山地区入口左側、

◎ワルナスビ(悪茄子)、ナス科、ナス属、多年草、

別名:(オニナスビ)、(アレチナスビ)、(ノハラナスビ)、
名前の由来:名付親の植物学者槇野富太郎の著書『植物一日一題』によると「ワルナスビとは「悪る茄子」の意である。…我が園中に植えた。…見かけによらぬ悪草で、地下茎が土中深く四方にはびこり、始末に負えない。…いやはや困ったものである。…この害草にワルナスビとは打ってつけの佳名であると思う。…」とあります。
○花言葉:「悪戯(いたずら)」、「欺瞞(ぎまん)」、
○アメリカ南東部(カロライナ周辺)の原産、日本では1906年(明治39年)千葉県成田市の御料牧場で牧野富太郎氏により発見、命名され、以降北海道から沖縄まで全国に広がっています。花は白色又は淡青色で同科のナスやジャガイモに似ており、春から秋まで咲き続けます。茎や葉に鋭いトゲがあるほか、全草にソラニンを含み有毒で食用にはできず、家畜が食べると場合によっては中毒死する事も有ります。外来生物法により要注意外来生物に指定されています。
★撮影日: 2017,6,3,　★撮影場所:妻木山地区入口

◎クララ(眩草)、マメ科、クララ属、多年生草本

薬用植物、○別名:「クサエンジュ」と呼ばれ、槐(エンジュ)の木に似ていることから。○和名俗名:「苦参＝くじん」,「久良良」「ゴウジゴロシ=蛆殺」「注」ゴウジゴシとは、方言でハエの幼虫のことを云う。○名前の由来:根汁をなめると頭がくらくらするほど苦いので眩草(くらくらぐさ)がクララになった説が有力です。(槇野富三郎博士の説)
○「クララ」は、日本在来種で中国、朝鮮半島に分布し、古来から有名な薬草だそうです。漢方名を苦参(くじん)と呼び、約2000年前の漢代に書かれた薬物の書「神農本草経」にも記述が有り、最近ヒットした朝鮮王朝の宮廷女官を描いたテレビ番組「チャングムの誓い」にも度々登上しているそうです。普通野原や道端、河川敷に自生する草本で、茎が1~1.5m位成長し下部は木質になる、葉は大形で奇数羽状複葉、長さが20~25cm、小葉は7~17対, 小葉の長さ2~4cm、幅1cm位で下面に微毛が有ります。花は、6~7月頃に淡黄色か微紅色の蝶形花を総状花序にびっしりと付けます。花の後には、キササゲに似た、細長い豆果をつけ数珠状に括れて、種子が4~5個付きます。根は、直根が肥大して塊根になります。また、全草に残存性の苦味と異臭が有ります。秋、地上部が枯れる頃、塊根を掘り採り、天日で速やかに乾燥させた物を生薬で苦参(くじん)と云います。「苦参」は、苦味健胃、強壮、消炎、等など内臓を丈夫にして食欲を増進する効果がありますが、全草に、大脳を麻痺させて痙攣を起し、呼吸運動神経麻痺で呼吸が止まり死に至ることがありますので、素人では絶対に服用してはいけません。また、農業用殺虫剤として利用されたり、変わった処では、平安時代に、茎の繊維を和紙の原料に利用いたことが知られています。「延喜式」(927)によると、アサ(麻)やガンピ(雁皮)等と一諸に、クララも製紙原料としていた記録が残されていて、当時は「苦参紙」と呼ばれていた様です。残念なことに現存しているものはなく、幻の和紙と云われます。
★撮影日:2017,6,3,　★撮影場所:妻木山地区



★むきばんだを歩く会★

- 指導：鷲見寛幸先生（鳥取県自然観察指導員）
- 毎月第１土曜日午前９時３０分～正午
- 入会金　２０００円　　毎回資料代　３００円　　いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ：むきばんだ応援団「むきばんだをあるく会」